広島大学附属中・高等学校研究紀要
〈第50号 二〇〇三〉

目的意識を明確にした書写学習の試み

――行事を生かして、国語科学習に書写学習を位置づける――

礒野美佳
岡本恵子

書写が、国語科の〔言語事項〕において、文字を、正しく整えて、読みやすく、速く書くことを目指して行う分野であることは、言うまでもない。しかし、新学習指導要領の実施に伴い、国語科の配当時間が削減された。同時に、書写の配当時間も削減せざるをえなかった。限られた時間の中で、新学習指導要領が掲げる「生きる力」をいかに育成するかが、本校においても課題であると考えた。

本稿は、中一学年での実践報告である。本校当該学年における書写は、三学期のみ週一時間実施されている。小学校で培われた書写力を伸ばすためにも、一学期より国語学習の中に書写を織り込むこととした。一年間を通じて、文字を書くことを意識させ、目的や必要に応じて、文字を正しく整えて速く書く能力を身に付けさせ、生活に役立てる態度を育てる。これらをめざして、意図的計画的に進めていこうと考えた。

具体的な活動としては、「漢字ポスターのタイトル字を書く」「招待状を書く」「故事成語を書き、額に飾る」が挙げられる。いずれも、読んでもらう、観てもらうという相手意識を持たせての活動である。結果、生徒たちは意欲・関心を持って学習に取り組んでいた。その姿は、「書く」という書写の授業はもちろんのこと、その前段階の「国語」における調べ学習、まとめ学習においても見られた。

本実践を通じて、相手意識を持たせられる教材選定や指導事項の精選をし、実践的な学習内容を設定することが大切であることを、改めて感じた。同時に、限られた時間数の中でも実りある書写学習・国語学習が可能であるとの手ごたえを得た。

一　はじめに

学習指導要領が改訂されて、誰しもとまどうことの一つは、やはり配当時間の減少であろう。本校国語科においても同様で、削減に伴い、書写に充てる時間も減少した。

すなわち、従来、各学年とも週一時間確保できていた書写の時間が、従来通り確保できたのは中二学年のみで、中三学年は一・二学期に週一時間、中一学年は三学期のみ週一時間実施の運びとなった。

当然従来通りの学習展開を望めようはずがない。したがって、限られた時間内に効果的な学習を行うためには、目標をしぼるとともに、いかに子どもたちが集中して学習に取り組めるような場を設定するかが大きな課題であると考えた。

今回の報告は中一学年での実践である。中一の書写は、三学期に突然始まり、あっという間に終わってしまって、学習の実がありにくいのではないかという危惧があった。そこで当初より書写を国語学習の中に織り込みながら、三学期にはそのまとめを行うという形で展開することにした。

文字の大きさや配列については、小学校四年生以降学習している。それは、毛筆による学習であったり、硬筆による学習であったりする。毛筆の場合は、文字数に限りがあり文字の大きさ、余白といった字配りが学習の目標であったろう。一方硬筆では字数が増え、前者の目標に加え、行の中心、字間、行間に注意して書くことが学習の目標であったろう。中学生となり、各教科のノートを中心に、日記、原稿用紙、メモや報告文など小学校に比べさらに分量も増え、書式も多様化し、さらに速く書くことも求めら

A Study on Students' *Shosha* in Consciousness of the Aim
– Placing Transcription in Japanese Learning by Making the Most of Events
Mika ISONO, Keiko OKAMOTO

れてくる。したがってこれらの形式に慣れ、調和するように書ける能力を養うことは日常の生活を豊かにすることにつながる。

こうした能力の育成には、子どもたち自身が具体的な目標を持って取り組む場の設定が効果的であると考え、国語学習の中に、そうした書写学習の場を織り込むことにした。

数年来、中一学年の国語を担当する場合、文化祭で「図書紹介ポスター」の展示発表を行ってきた。入学直後に行う図書室利用のためのオリエンテーション、図書室でのオリエンテーリングや、教科書関連図書探し等、遊びの要素を加えながら、子どもたちに図書室に親しませるよう働きかけ、そこで見つけた「友達にも読んでほしい本」をポスターとしていかに魅力的に紹介するか工夫させ、文化祭で展示してきた。

その積み重ねの中から、昨年度、書写担当の谷口と、せっかくの展示をさらに生かすことはできないかと、文化祭への招待状を書かせることにした。すると、招待相手を意識するためか、従来よりいっそう熱心にポスター作成のための活動にも取り組む子どもたちの姿が見られるとともに、招待状を書くという活動そのものも、「とても役に立つ学習」（生徒の振り返りメモより）という自覚を持って、熱心に取り組んでいた。

また、新課程においては古典についても削減せざるを得ない。ことに漢文に割ける時間は極めてわずかな時間でしかない。中一の教科書の多くは故事成語を採っているが、そのわずかな時間で説明したのではおもしろさの片鱗にも触れることは難しかろう。古典との初めての出会いであるから、少しずつでもよい「おもしろい」という印象を中二・中三と重ね、高校での学習に繋ぎたいものである。

そのためにはまず、漢字を総合的に捉える活動を通して漢字への興味、そこから漢文への興味を引き出したいというねらいで、本年度は、図書紹介は別の形で行い、漢字ポスターに取り組ませることにした。

書写の担当は、谷口の後任である礒野に替わったが、これは、前述のように昨年度にも増して限られた時間の中で書写と国語の学習活動をより効果的に行いたいと試みた実践である。

二　学習の流れ

五月

〈漢字ポスター制作〉

好きな漢字についての発表

各自好きな漢字とその理由についてカードにまとめ、発表し、聞く。（1時間）

発表のための漢字調べと漢字の学習

様々な漢字を調べた中から、ポスターで紹介する漢字一文字を選び、さらにその漢字について、図書室の資料や、各自の辞典等を利用して詳しく調べる。（3時間）

ただし、内1時間は、調べる過程で出てきた疑問を中心に、国語教科書を用いて漢字について学習する。

・文字の学習室①「文字の種類と漢字の歴史」
・文字の学習室②「漢字の成り立ち」
・文字の学習室③「漢字の部首」
・文字の学習室④「熟語の構成」

ポスターの下書き

白画用紙を受け取り、タイトル字を書く色画用紙の見本を見て

イメージしながら、デザインと割付を考え、内容を検討する。（1時間）

…内容の不十分なものはここで改めて調べる必要に気づく。

タイトル字を書く …A

場所を書道教室に移し、書写の導入後、紹介する漢字一文字を色画用紙に毛筆で書く。（1時間）

ポスター作成

色画用紙を白画用紙に配置し、ポスターを完成する。（1時間）

六月

〈故事成語の学習〉

故事成語についての理解

ポスター制作を通して故事成語について知ったことがらを発表。

教科書の説明を読んで、中国伝来の言葉に故事成語があることを確認する。（0.5時間）

「五十歩百歩」の学習

・漢文訓読のリズムを楽しみながら読めるよう、繰り返し音読する。

・孟子のたとえ話の意図を読み取り、弁舌の巧みさを知り、故事成語に関心を持つ。（1.5時間）

「矛盾」の学習

・登場人物の心情を考えながら訓読できるよう、繰り返し音読する。

・教科書と、漢字ポスターから、他にも多くの故事成語があることを知る。（1時間）

〈文化祭への招待状作成〉

招待状の文面を考える

・招待状での留意事項について意見交換する。

・教科書「書くことの学習―手紙を書く」を参考に往復葉書に、改まって書く場合の招待状の文面を考える。（1時間）

招待状を書く …B

往復葉書の書き方を学ぶとともに、目的意識、相手意識を持って、字配りなどを考えながら丁寧に招待状を書く。（2時間）

夏休み課題

〈故事成語探し〉

二学期に「故事成語のトリビア」を行うことを知り、話が紹介できるような、できるだけエピソードに富んだ故事成語を探す。

十月

〈故事成語のトリビア〉

故事成語を選ぶ

持ち寄った故事成語の一覧で、さまざまな故事成語があることを知る。

三

参考資料を紹介し合いながら、各自トリビアに用いる故事成語を選ぶ。（1時間）

トリビアを探す

教育実習に入り、各自、放課後等を利用し、故事成語の説明、トリビアにする話題を図書室資料やインターネットで探す。

十一月

発表上の留意事項の確認、発表準備

トリビアをおもしろく語るための工夫を話し合うとともに、評価方法を工夫する。

画用紙に故事成語とトリビアを書き、声に出して練習しながら原稿を工夫する。（1時間）

トリビア

発表・評価（表彰は後日）（2時間）

故事成語のまとめ

故事成語、読み、意味、故事、トリビアの一覧を読み、後で確認テスト。

一月

故事成語を半紙に書く …C

額を手作りし、作品を完成

注

□ 国語学習として岡本が担当

■ 書写学習として礒野が担当（但し、A・Bについてはティームティーチング）

以上の学習の流れを概括すれば、子ども自身に目的意識を持って取り組ませ、その達成感を味わわせることができるように、国語学習に書写学習を織り込んで学習の成果を形にして発表する場を用意するということである。

限られた時間の上に学校行事も多く、まとまった時間はとりにくかったが、思い切って内容を絞り、無理のない時期に実施することで一応やり通せる見通しが立った。

三　授業の実際1（Aについて）

学習目標

1　文字を正しく書くこと

2　文字の大きさや配置に留意すること

指導過程

①書道室の紹介

②練習

③手本を見て字形の整え方のポイントを考える

④清書

準備物

・練習用紙（半紙―13×13センチ）…一人5枚

・清書用紙（色画用紙―13×13センチ）…一人3枚

・絵の具セット

ここでは、中学での書写の導入を兼ねて、書写の学習目標を提示すると

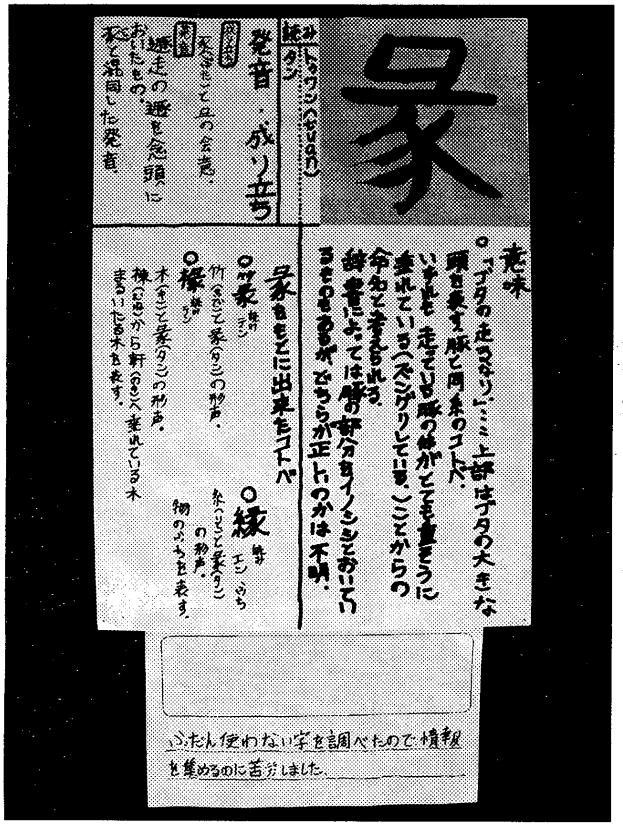
ともに、書道教室、道具等についての説明も行った。その上で、まず、一文字を毛筆で丁寧に書く学習に取り組ませた。

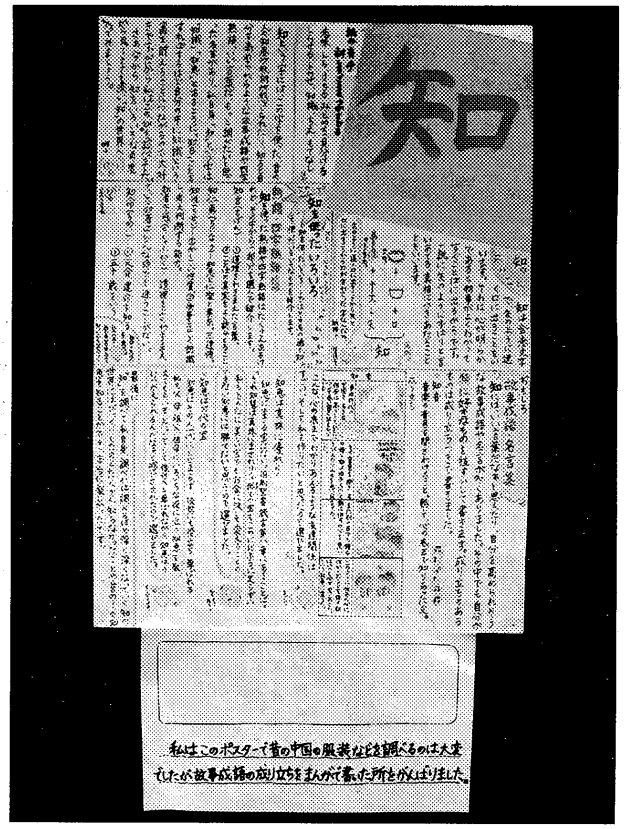
それぞれが選んだ漢字は、当初各自が、自分の名前の漢字であるとか、なんとなくであるとか言いながら好きな漢字として挙げた漢字とは大きく変わり、様々な漢字を調べた結果、意味の広がりや成り立ち等豊かな漢字の世界を紹介したいとの意図から、画数の多い漢字が増加した。そのため、用紙の大きさから考えて、多少危ぶまれる気もしたが、子どもたちは自分たちが考えて選んだだけあって、集中的に取り組み、ほとんどの生徒が時間内に指定の枚数内で満足できる作品を完成させることができた。

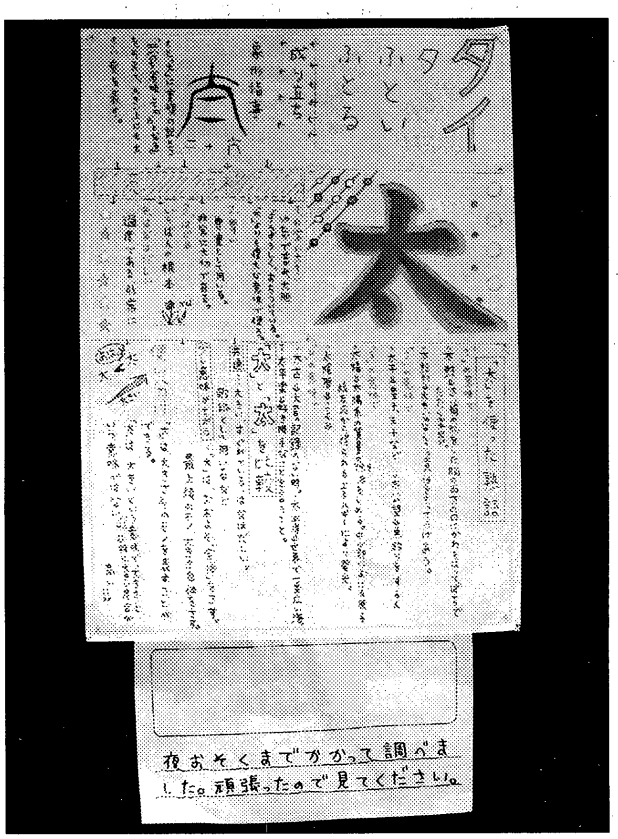
当初、色画用紙に鋏を入れて、形をデザインすることは考えておらず、子どもたちも、四角い紙に配置を考えて文字を書いていた。しかしいざ貼り付ける段になって、生徒たちのたっての希望で、結果的には様々に趣向を凝らしたものとなった。

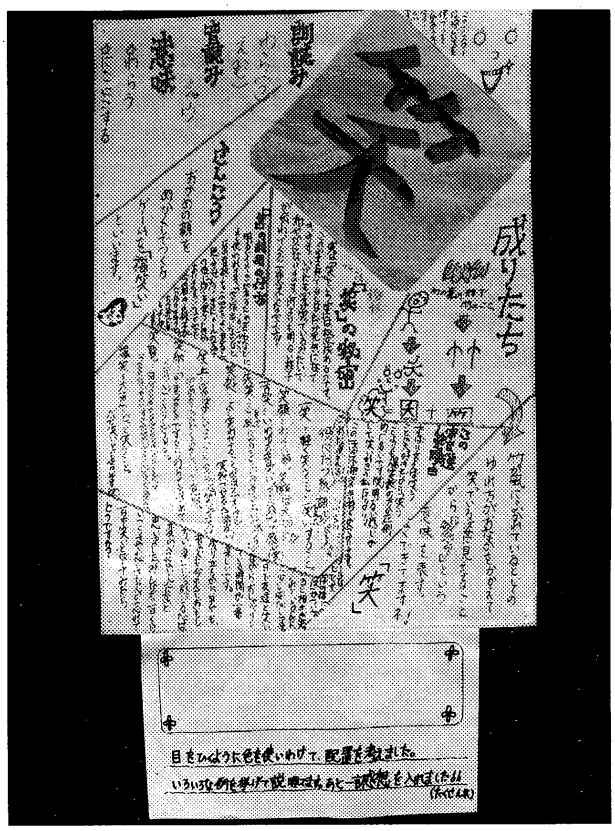
実際のポスターの一部〔資料1〕を次に紹介する。

〔資料1〕









四　授業の実際２（Ｂについて）

学習目標

１　文字は丁寧にはっきりと書くこと

２　文字の大きさや配置・配列に留意すること

スキルの習得・定着をはかるため、次の三段階に分け、ティームティーチングにて２時間かけて授業を行った。

①宛名（往信・返信）の書き方

②宛先（往信・返信）の書き方

③本文の書き方

それぞれの過程について、以下詳細を述べる。

①　宛名（往信・返信）の書き方

はがきの宛名のワークシート〔資料２右半分〕で練習をする。

・名前の字数によって字間を変える

・宛名の文字の大きさを宛先等の基準とする

文字が小さくなりがちになることを予想し、「宛名が堂々と書かれていると立派に見えるよ。」と声がけをし、枠内に適当な大きさで書かせた。鉛筆を用い、枠内に収まりよく書けたと各自が納得できるよう書き直しができるようにした。

②　宛先（往信・返信）の書き方

はがきの表書きの配置・配列を説明する。〔資料３〕

・文字の大きさは、

宛　名

＜

六

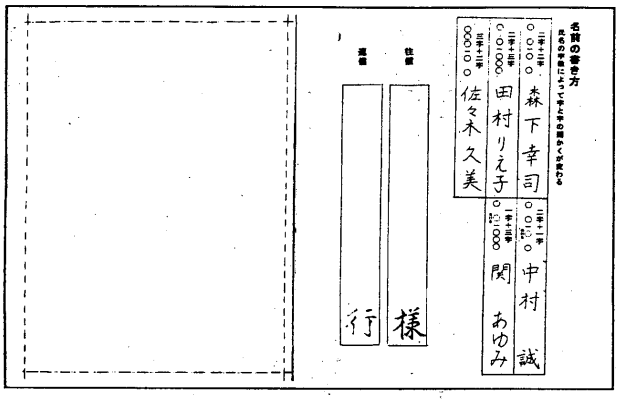
宛先
<
差出人
<
差出人住所

・郵便番号のマスをたよりに行の中心を設ける。
・行が増えると、行の中心位置が変わる。

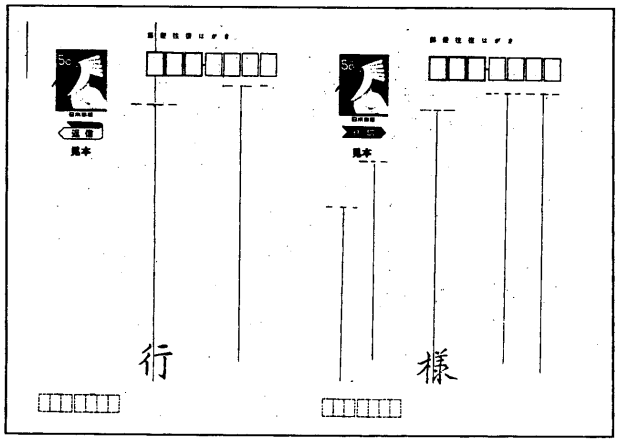
ワークシート〔資料4〕で練習する。

・①で書き上げた宛名を手本とし、宛名を書く。
・宛名、宛先、差出人、差出人住所の順に書く。
・マスからはみ出したり、小さくなりすぎないように郵便番号を書く。

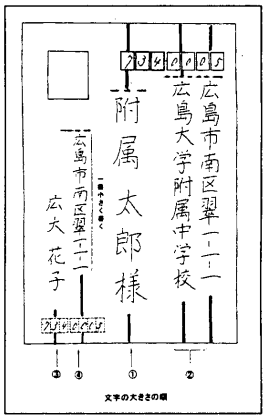
〔資料2〕



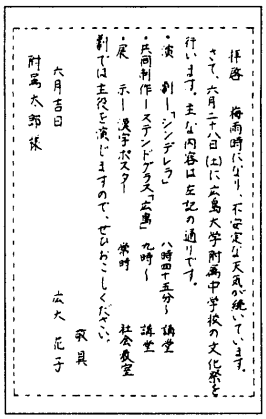
〔資料4〕



〔資料3〕



〔資料5〕


拝啓　梅雨時になり、不安定な天気が続いています。
さて、六月二十八日(土)に広島大学附属中学校の文化祭を行います。主な内容は左記の通りです。
・演　劇―「シンデレラ」　八時四十五分～　講堂
・共同制作―ステンドグラス「広島」　九時～　講堂
・展　示―漢字ポスター　常時　社会教室
劇では主役を演じますので、ぜひおこしください。
敬具
六月吉日　広大花子
附属太郎様

③　本文の書き方

本文の配置・配列を説明する。〔資料5〕

・周囲に余白を取ること
・行の中心をまっすぐに取ること

ワークシート〔資料2左半分〕で練習する。

・目安として一行二十五文字とし、行割をする。
・行数によって、行間を変える。

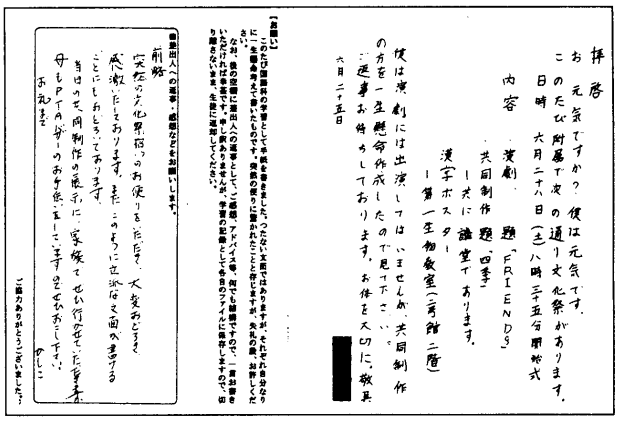
④　清書

・②③のワークシートを手本にする。
・本文については、行割を鉛筆で行ってから清書をする。
・ボールペンにて清書を行う。

次頁に生徒の書いた招待状の一部を紹介する。〔資料6〕ただし、プライバシー保護の関係で、裏面の招待状部分のみとする。

本単元後、漢字ポスターの展示のために、ポスターの下に添付する名前を書かせた。生徒自身の中に、文字の大きさ・配置・配列を考えて書こうとする姿勢が見られた。案内状を書いて学んだことを応用する力が着実に育っているようである。

〔資料6〕



拝啓

お元気ですか？僕は元気です。

このたび附属で次の通り文化祭があります。

日時　六月二十八日（土）八時三十五分開始式

内容　・演劇　題「FRIENDS」

・共同制作　題「四季」

・共に語り　ます。

・漢字ポスター

・第一生物教室（旧館二階）

僕は演劇には出演しては　いません。共同制作の方を一生懸命作成したのです。見てください。

ご連絡お待ちしております。お体を大切に。敬具

[redacted]

六月二十五日

【お願い】

・ご出席の可能性のお答えとして、感想をお書きしたり、つたない文章ではありますが、されたれば幸いなのです。

・ご感想等は、アドバイス等、何でも結構ですので、一言お書きいただけますようお願いします。

・なお、他の生徒に同人の名等としてご紹介

して注意をはらわせる。

・横画の方向と間隔

・文字の組み立て方

② 清書

清書用紙は五十センチ×三十センチのものを用意した。子どもたちが調べてきた故事成語は二文字から十四字のものまであった。文字が多くなると、普通の半紙では中学一年生には文字を収めるだけでも大変であると判断し、多少大きな紙にした。練習で字形は整ってきたので、配置・配列について考えさえるようにする。

③ 額作り

限られた時間の中で、子どもたちが簡単に楽しんで、かつそれなりに見栄えがし、安価にできることを考えて、材料を選択した。発泡スチロールを土台にする。そこに、マカロニやボタンやビーズなどを木工用ボンドで貼り付け、ラッカーにて仕上げをする。貼り付けるものにより、様々な額ができる予定である。「漢字ポスター」の活動の様子から、貼り付ける素材や色に工夫をこらすことが予想される。自分たちが書いた作品への愛着を、次年度への意欲につなげたい。

六　反省と課題

本年度、三学期のみにしか書写の時間を持てないことになった中一学年、その一クラスで行った実践である。総じて言えば、こういう形で実施できたことは効果的であったと言ってよかろう。

子どもたちは展示するポスターの題字を、懸命に書いた。自分で書いた文字に満足できないとき、配られた手本、それを彼らは食い入るように見つめ、考えてから書いた。それは、限られた時間、限られた枚数で書かねばならないという状況に加えて、ポスターの一番大切な部分であることを自覚していたからであろうし、一人ひとりのための手本が用意されていたことで、どの子も本来的に持っている「うまく書きたい」という気持ちを一層強くしたからではなかったか。放課後一枚でもいいからどうしても書かせて欲しいと懇願した生徒もいた。

招待状を書くときにも、一生懸命であった。初めて知る往復葉書の書き方がまず彼らの興味を引いた。懸賞等で往復葉書を使用したことのある生徒もいたが、思いの外少数に過ぎなかった。また、返事がもらえるというのも、楽しみな様子で、そのことは自然に手紙の相手への思いとなって、文面を考える助けとなった。

相手は、自分で届けられる目上の人、とした。書きやすさから定型の往復葉書よりは少し大判の葉書にしたため送料が高くなること、できるだけ早く返事をいただきたいため、またそれを自身で届けることで説明等の会話の機会を作るという意図があった。用件を伝える文面であると同時に、相手に是非来たいと思っていただけるように書こうと呼びかけると、口では「来て欲しくない」などと言う生徒も、ノートの下書きをより詳しくなるよう書き直したりしていた。

いざ葉書を前にするといっそう相手意識も強まったのか、文字の大きさや配列に気を配りながら、読みやすいよう丁寧に書こうとしていた。

このように、相手意識を持つことで、本単元の目的である文字の大きさや配列について学習意欲は喚起されたように思われた。同時に、文化祭への参加意識も高まったように感じられた。

このとき、小学校や塾の先生等に書く生徒も見られたが、大半の生徒達が、両親宛に案内状を書いた。その両親からの返事は、二つのパターンに分けられる。

一つは、このような文章を書けるようになった子どもの成長を喜び、褒

九

め、文化祭に出席したい、あるいは仕事の都合で出席できないことが非常に残念であると伝えるもの。もう一つは、子どもが書いた案内状について、評価し意見を加えるものである。

前者の場合は、どの子もやはり満足そうな表情で、今後の学習の励みとなった様子である。後者の場合も、アドバイスとともに成長を喜ぶような言葉が添えてあるものは、同様によい励みとなったようだ。

ただ、次のような生徒がいた。返事をもらってきたと提出に来たが、元気がなかった。聞くと返信の宛名の「行」を「様」に書きかえられてしまったことで、悪いことをしたというのである。その場で、それが正式であることを伝えると、ようやく安心した表情を浮かべた。なぜ、書きかえられたことに気がついた時点で、両親に尋ねられないのだろうか。

また少数ではあるが、アドバイスが、保護者の方はそれほどの意図ではないであろうに、案に相違して、お叱りの響きを伝えるようなものもあった。

授業者としては、突然の便りに驚かれ、自然な感想を書いていただき、それによってちょっとした会話の機会ができることを期待して、事前に保護者へのお願いをするということをしなかった。しかしこうしてみると、事前に主旨を伝え、ご協力を仰ぐべきだったのかもしれない。

本校の話ではないが、五年ほど前から字が汚いから文章をかくことが嫌いだということを口にする生徒が見られる。字が汚いことが原因で、文章を書くという自己表現に対する嫌悪感を抱かせているなら、それは非常に悲しい現実であり、国語科教員としては重大な問題であると感じていた。「書くこと」に対する嫌悪感を払拭するために、二方向からのアプローチを考えていた。一つは、自分の文字が少しでもうまくなったと生徒に思わせるよう、書写の授業の方法を創意工夫すること。もう一つは、国語の授業の中で文章を書くことは楽しいと思わせるような授業をすることである。本単元は、相手意識を持って案内状を書くことで文章表現の充実をはかり、文字を書くことを意識させたいということが、根底にあった。往復はがきという性質上、返事をもらえる楽しさ、人が書いた文字の印象を味わわせたかった。それがどこまで達成されたかは分からない。しかし、こうした明確な目的意識を持って取り組む学習活動の中で繰り返し指導していくことで、生きて働く力が育成されると考えている。